

言語学、はじめの一步（４）

もうすぐ待ちに待った夏休み。これだけまとまった休みは、長い人生の中でも大変貴重です。日頃手を付けられないようなテーマに、ぜひ取り組んで下さい。その中に言語学を加えてみてはいかがでしょう...？

Q：では、前回に引き続き音声学、音韻論に関してもう少しお話しして頂けますか？

A：はい。前回、音声学では英語のpinとspinの/p/の音はまったく別の音として区別するという話をしました。前者は氣息を伴う音(=[pʰ])で、後者は氣息を伴わない音(=[p])です。ところが一般の英語母国語話者は両者は同じ音だと認識しています。このように話し手が心の中で同じ音だと思っ発する音を音素といいます。そして音声学的に区別する音のことを異音と言います。つまり、[pʰ]と[p]は同一の音素/p/の異音ということになるわけです。

Q：同じようなことは日本語にもありますか？

A：そうですね、例えば八行の子音、つまり「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」ですが、/h/の音はすべて同じだと思っしていませんか？

Q：う～ん。考えたこともありませんね。

A：そうですね。各々の音の詳しい説明は省きますが、実は音声学的には「ハ」「ヘ」「ホ」は[h]で、「ヒ」は[ç]、「フ」は[ɸ]という音です。つまり、八行の音素/h/は[h]、[ç]、[ɸ]の三つの異音を持っているということになります。

Q：日本語の話者は無意識のうちに使い分けているのですか？

A：そういうことです。また音素は意味を区別するための最小の単位でもあります。例えば英語の/l/と/r/を/_i:d/の下線部に入れたらどうなるでしょう？

Q：/l i:d/は「lead(～を導く)」で/r i:d/は「read(～を読む)」ですか？

A：その通りです。つまり、/l/と/r/を入れ替えると意味が変わってしまいます。つまり英語では/l/と/r/はそれぞれ独立した異なる音素ということになるわけです。ところが日本語では例えば/lingo/と/ringo/は違う意味

の単語になるのでしょうか？

Q：どちらも「リンゴ」ですね。

A：そうですね。ということは日本語話者は/l/と/r/を区別していないということです。

Q：なるほど。それで日本人が英語を勉強するときに/l/と/r/の発音に苦労するわけですね。

A：はい。使える音の種類や数はそれぞれの言語によって決まっていますので、その種類や数の違いが外国語の発音を習得する際に問題となるわけです。

Q：分かりました。それでは最後に関連書籍をお願いします。

A：では今回は『ファンダメンタル音声学』今井邦彦著、ひつじ書房(2007年)を挙げておきたいと思います。

今回取り上げた参考文献について

『ファンダメンタル音声学』の請求記号は831.1-lmaです。どこに配架されているかは、蔵書検索端末で調べてみて下さい。「配架場所」の所に表示されているのが、この図書が置かれている場所です。

本書は英語を母語としない我々に対して、効果的に「良い英語発音」を身につける手助けをしてくれます。著者は、一定年齢を過ぎてからの「理屈抜きのおまね」は、誤った発音を産出する結果になる確率が非常に高いとし、発音は「おまね」ではなくて「理屈」が重要だと主張しています。

本書の特徴の1つは、付属CDがあるという事です。このCDには見本となる発音だけではなくて、「良くない発音」も収録されています。もう1つの特徴は、文強勢とintonationに重点が置かれているという点にあります。

本書に付属されているCDは、書籍と共に借りる事が出来ます。借り受けている期間中は、CDを自宅で利用して頂いても構いませんが、図書館へ返却する際には忘れずにCDを添えて下さい。

にゅうがく なおや

(福井工業大学講師・英語学・英語史)

ふじい たつや (司書・係長・アジア関係図書館)